

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K12578

研究課題名（和文）月経周期に着目した育児期女性の経年的QOL評価と支援ツールの開発

研究課題名（英文）Longitudinal study on the assessment of quality of life and the development of support tools for parenting women focusing on the menstrual cycle

研究代表者

都筑 千景（TSUZUKI, CHIKAGE）

大阪公立大学・大学院看護学研究科 ・教授

研究者番号：00364034

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、育児期女性の月経周期に関連する症状とQOL、養育行動との関連を、経年的、定量的に明らかにすること、その結果を踏まえ育児期女性に月経周期における症状や対処に関する支援ツールを開発することである。前課題に引き続き、継続調査に同意が得られた293名のうち4時点の回答が得られた81名の変化を調べた。結果、QOLは一般30代女性に比べ有意に高く、1.6歳から3歳にかけて低下するも、3歳から5歳にかけて上昇した。子どもへの不適切な関わりは1.6歳から3歳にかけ増加傾向にあったが、3歳から5歳ではほぼ横ばいであった。本結果に基づき、母親向けの支援ツールとして啓発パンフレットを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの女性に起こりうる月経周期に関する症状が、育児期女性のQOLや養育行動とどう関連しているかについて研究したものはほとんどない。これらの症状は衝動的な暴力や感情の爆発につながるとされ、虐待発生に関連があると考えられているが、いまだ明らかではない。月経周期に関する症状に着目する重要性を明確にすることで、育児期女性の子育て支援の必要性に関するアセスメントや評価などに活用することができる。また、育児期女性の月経に関するヘルスリテラシーを向上させ、支援に活用できるツールを開発することで、育児期女性自身の気づきを促すことにつながり、より質の高い子育て支援が可能になると考える。

研究成果の概要（英文）：The aims of this study were to quantitatively identify changes over time in menstrual cycle-related symptoms, quality of life and nurturing behaviours among parenting women and, based on the study findings, to develop support tools for parenting women regarding symptoms and coping during the menstrual cycle. Following on from the previous project, this study examined changes in 81 of the 293 women who agreed to participate in the ongoing survey and who responded at four time points. The results showed that their quality of life was significantly higher than that of the average woman in her 30s, declining from the age of 1.6 to 3 years, but increasing from the age of 3 to 5 years. Inappropriate involvement with children tended to increase from the age of 1.6 to 3 years but remained almost unchanged from the age of 3 to 5 years. Based on the findings, an awareness-raising pamphlet was developed as a support tool for mothers.

研究分野：公衆衛生看護学分野

キーワード：子育て支援 子ども虐待予防 PMDD PMS QOL 月経 精神的症状 母子保健

1. 研究開始当初の背景

児童虐待予防は我が国の喫緊の課題であるが、母子保健領域においては児童虐待に至るまでの「発生予防」が重点施策として展開されている。虐待発生予防対策においては、母親の悩みや育児不安を早期に発見し、気になるレベルでの寄り添う支援が課題として挙げられている。

女性の心身の不調として注目されている状態に月経前症候群 (premenstrual syndrome: 以下、PMS とする) がある。PMS は「月経前 3~10 日の間続く精神的あるいは身体的症状で、月経発来とともに減退ないし消失するもの」と定義されており (日本産婦人科学会 1999)、その頻度は報告により異なるが何らかの症状があるものが 60.8~87.2% (松本 1956)、90% 以上 (ダルトン 2007) と報告されている。注目すべきは、PMS には抑うつや益怒性などの精神症状の頻度が高いことである。しかし、育児期の女性における PMS に関する研究は少ないが、月経期における症状が顕著な女性は子どもへの対応能力が低下している (島田ら 2009) との報告もあり、母親の子どもへの感情的な対応に月経周期による心身の不調が影響している可能性が考えられる。しかし、現状の子育て支援につなげるためのアセスメントやチェックリストなどに、月経周期に関連する症状等の項目や視点は見当たらない。育児期女性の月経周期に関連する項目と育児期女性の QOL や不適切な養育行動との関連を明らかにすることで、育児期女性の月経周期に関する症状に着目することの重要性を検証でき、育児期女性の QOL の向上や虐待予防に資することが期待される。

著者らは平成 25 年度から月経周期に着目し、育児期女性における QOL 評価と子育てへの影響に関する縦断研究に取り組んでいる (H25-28)。具体的には、PMS の重症型であり、精神的症状を中心とした PMDD (premenstrual dysphoric disorder: 月経前気分不快障害) 及び PMS 実態把握と、PMDD と育児期女性の QOL および不適切な養育行動についての関連を検討、経時的な変化について継続して取り組んでいるところである。

2. 研究の目的

本研究では、前課題を継続し、育児期女性における月経周期に関連する症状と QOL、不適切な養育行動への関連および親の生活の変化を経年的、定量的に明確にすることを目的とした。本研究結果から、実践現場で活用できる育児期女性に即した、また育児期女性に対する月経周期に関連する症状に着目したヘルスリテラシーを向上させるための啓発・支援ツールを開発する。

3. 研究の方法

1) 研究対象者

都市部郊外の A 市に居住する平成 25 年 5 月~平成 27 年 7 月に生まれた第 1 子を持つ女性 955 名を対象とした。前課題 (H25-28) の調査にてベースライン時に継続調査に同意が得られた 293 名のうち、1 回目 (出生 4 か月時点) かつ 2 回目調査 (1 歳 6 か月時点) に回答いただいた育児期女性 143 名を対象とした。

2) 調査方法

研究デザインは前向きコホート研究であり、ベースライン時に調査対象とした 1 市において 4 時点での縦断調査を実施する。現在、調査は 1 回目と 2 回目が終了しており、本研究期間では 3 回目 (3 歳児)、4 回目 (5 歳児) を実施する。調査方法は自記式質問紙調査であり、A 市にて連結可能匿名化した後、調査票を郵送により配布し、郵送により回収した。

3) 調査項目

- ・基本情報: 調査ごとに基本属性 (子どもの数、就労状況、家族形態など)、夫とかかわり状況 3 項目、ソーシャルキャピタルに関する項目
- ・月経随伴症状: DSM- による PMDD (premenstrual dysphoric disorder: 月経前不快気分障害 = PMS 類似の病態) の項目を使用し、PMDD の判定には宮岡ら (2009) が開発した PMDD 評価尺度による PMDD 疑いの基準を採用
- ・WHO/QOL (WHO/田崎 1997)
- ・SOC13 項目 (山崎ら 1999)
- ・不適切な養育行動 18 項目、行動不安の 2 項目、養育肯定感 (都筑 2011)
- ・情緒的サポートネットワーク、手段的サポートネットワーク (宗像 1983)

4) 分析方法

各時点における調査項目の記述統計を求め、4 回目調査における PMDD 疑いの有無と属性等について t 検定、² 検定にて比較した。4 時点の縦断的な QOL および不適切な養育行動の 4 時点の経時的変化について対応ある t 検定またはウィルコクソン符号付順位検定にて比較した。第 2 回目以降の調査においては、PMDD 疑いのある人が 5 名以下だったため、ベースライン調査 (N = 1,284) 結果を深堀した。PMDD 疑いの有無および PMS 症状の有無に着目し、全体を 3 群に分け、中高群、低群に分けた QOL との関連をロジスティック回帰分析にて検討した。有意水準は $p < 0.05$ とした。

5) 調査期間 平成 29 年 4 月 ~ 令和 2 年 7 月

6) 倫理的配慮

研究は研究代表者の前所属の倫理委員会への承認を得て実施した。縦断調査に対しては、A 市にて連結可能匿名化データした後、研究用 ID を付した調査票により、経時的に追跡した。また、前課題と同様、3 回目の調査は 2 回目調査時に継続調査の同意を得たものに対して実施し、4 回目も同様とした。対象者名簿は A 市にて保管し、研究者は個人情報を取得しないようにした。

4. 研究成果

1) 基本属性

ベースライン時に継続調査の同意が得られた 239 名に調査票を配布し、時点ごとに次回調査の同意の有無を確認し、4 時点すべての回答が得られた 81 名 (回収率 33.9%) を分析対象とした。

81 名の 4 回目調査時における女性の属性は、平均年齢 37.8 ± 4.8 歳、修学年数 14.7 年、就労有 46.9%、核家族世帯 94.9%、子どもの平均人数 1.8 ± 0.8 人であり、第 1 子の平均年齢は 4.9 ± 0.3 歳であった。経済状態余裕あり 53.1%、夫はあなたの話をよく聞いてくれる 86.4%、居住年数 5 年以上 66.7%、居住地域に愛着有 37.0%、近所づきあい有 55.6%、子育てサークルへの参加有 27.2%、趣味やボランティアグループへの参加 8.6%、女性の健康状態、子どもの健康状態については良いが 88.6%、96.3% であった。月経の再開有 71.6%、再開なし 11.1%、妊娠中 4.9% であり、PMDD 疑いのある人は 5 人 (6.1%) であった。

2) PMDD 疑いの有無による比較 (4 回目調査)

4 回目調査において、PMDD 疑い有群となし群における属性、QOL、SOC、不適切な養育行動等を比較したところ、家族外の情緒的サポートネットワークが有意に少なかったが、それ以外の有意な項目はなかった。

3) QOL と PMDD の有無および PMS 症状の有無との関連

ベースライン調査 (N = 1,284) における PMS 症状の有訴割合を表 1 に示した。また、PMS 症状が一つ以上ある人は全体の 65.4%、2 つ以上ある人は 47.5% であった。

女性の年齢、就労、子の数、経済状況、夫が話を聞いてくれる、母および子の健康状態を調整したロジスティック回帰分析の結果、PMDD 疑い有の人は QOL 中高群と比較して QOL 低群に有意に多く存在した (オッズ比 2.638、95% CI 1.441-4.830)。また、PMS 症状が一つ以上有の人は QOL 低群に有意に多く存在した (オッズ比 1.431、95% CI 1.074-1.906)。

4) 4 時点の経時的変化

父・母の生活の変化

子が 4 か月と 5 歳時点の父母の生活の変化について表 2 に示した。就労している人はほぼ 10 倍に、居住年数は長くなり、近所づきあいやサークルなどに参加する人が増えていた。

父親が子どもと接する時間は減っていたが、子どもが就寝前までに帰宅はあまり変わらず、母親の話をよく聞く父親は微減という状況であった。

表1 主なPMS症状の有訴割合

何らかの身体症状がある	49.8%
イライラがある	45.4%
自分をコントロールできない感じになる	18.5%
涙もろくなる	14.8%
抑うつ症状がある	14.7%
家事や仕事、人間関係に何らかの支障が強くなった	6.3%

表2 父・母の生活の変化

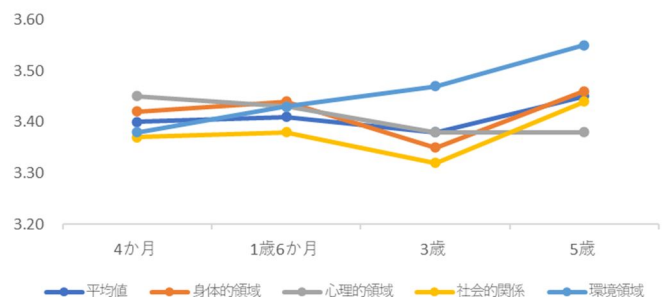
	4か月	5歳
仕事あり	4.9%	46.9%
居住年数5年以上	19.8%	66.7%
母 近所づきあいあり	24.7%	55.6%
子育てサークルなどの参加あり	6.2%	27.2%
趣味などのグループに参加あり	6.2%	8.8%
父 ババと子どもが接する時間あり	56.8%	29.6%
子どもが就寝前にババが帰宅する	67.9%	65.5%
ババは話をよく聞いてくれる	95.1%	86.4%

育児期女性の QOL、不適切な養育行動、養育肯定感、サポートネットワークの変化

育児期女性の 4 時点での QOL の変化では、身体的領域で 1 歳 6 か月と 3 歳の比較で上昇傾向、3 歳と 5 歳の比較で下降傾向、環境領域で 4 か月と 5 歳の比較で有意な上昇を示した (図)。

不適切な養育行動では、軽微な身体的・心理的養育行動 11 項目で子どもの年齢が大きくなるにつれて不適切養育行動得点が増え、特に 1 歳 6 か月から 3 歳の変化が大きかった。

QOLの経年変化



また、3歳から5歳の変化は他の年齢区分に比べて小さいものが多く、一部低下もしくは横ばいの項目もあった。項目毎の特徴では、「お子さんが傷つくようなことを言う」「お子さんをほめるより叱ることが多い」「お子さんに感情的に八つ当たりすることがある」「お子さんを大声で叱ることがある」は他の項目よりも得点が高かった。「お子さんのお尻や手をたたくことがある」「お子さんの顔や頭をたたくことがある」は4か月と1歳6か月、1歳6か月と3歳で有意に上昇するが3歳と5歳の比較では差がなかった。「叩いてしまいそうで怖いと思うことがある」は4か月と1歳6か月、1歳6か月と3歳の比較で有意に上昇したが、3歳と5歳の比較では差はみられなかった。

養育肯定感は3歳と5歳、4か月と5歳の比較で有意な上昇を示した。SOCについてはどの時点の比較においても有意な差はみられなかった。サポートネットワークでは、4か月と1歳6か月、3歳と5歳、4か月と5歳の比較で家族内の情緒的サポートが有意に低下していた。家族外の手段的サポートは3歳と5歳の比較で増加傾向にあった。

5) 支援ツールの開発

上記の研究結果に基づき、育児期女性向けの啓発パンフレット「子育て期の女性のQOLについて考えてみよう!」を作成した。主な内容は、PMSやPMDDの状況、子どもが大きくなると生活やQOL、子どもへの不適切な養育行動、サポートネットワークはどう変化するか、うまく向き合うための予防とセルフケアである。



総括

本研究では、育児期女性のPMDD疑いやPMS症状の有無とQOLとの関連が明らかになったことから、月経周期に関する症状の有無や程度は、育児期女性のQOLに大きな影響を与えている可能性が示唆された。よって、育児期女性のQOL向上のためには、育児期女性の月経周期に関する症状のリテラシー向上と予防やセルフケアに関する情報提供が必要である。

縦断調査の結果から、子どもが大きくなるにつれ、居住期間が長くなり、地域での付き合いやグループ参加が増えていることから、育児期女性を取り巻く環境が次第に醸成されていくことが推察された。一方で仕事を始める女性が増え、父親は子どもと接する時間が減少し、家族内の情緒的サポートが低下するなど、育児期女性が仕事と育児を両立する中で、十分なサポートが得られていない状況がうかがえた。しかしながら、育児期女性のQOLは、一般的な30代女性と比較して身体的領域以外は高かった。つまり、育児期女性にとって子育ては大変と感じながらも、母親としての満足感や充実感が得られるものであり、その結果として高いQOLが保たれていると推察された。

これらの研究結果に基づき作成した啓発パンフレットは、今後調査協力いただいた自治体を中心に配布する予定である。今後は、育児期女性への支援者及び育児期女性自身において月経周期に関する症状に着目することの重要性を伝えること、そして、この視点を子育て支援の必要性に関するアセスメントや評価につなげていくことが課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 都筑 千景
2. 発表標題 育児期女性におけるQOLの経時的変化 - 子どもが4か月から5歳までの縦断的調査 -
3. 学会等名 第12回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Taeko, Masumoto Chikage, Tsuzuki Kenji, Kato
2. 発表標題 Behavioral Changes in Parenting Females- A Longitudinal Study from Four Months to Five Years after Childbirth -
3. 学会等名 6th International Conference of Global Network of Public Health Nursing (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 榎本妙子、都筑千景、加藤憲司
2. 発表標題 育児期女性におけるSense of Coherence(SOC)と不適切養育行動との関連 - 4か月・1.6歳・3歳時点での比較 -
3. 学会等名 第9回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 榎本妙子、都筑千景、加藤憲司
2. 発表標題 育児期女性における不適切養育行動の変化と関連要因 - 0歳・1.6歳・3歳時点での比較 -
3. 学会等名 第23回日本地域看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 榎本妙子、都筑千景、加藤憲司
2. 発表標題 育児期女性におけるSense of Coherence(SOC)の経年変化と関連要因 - 0歳・1.6歳・3歳時点での比較 -
3. 学会等名 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 都筑千景、榎本妙子、加藤憲司
2. 発表標題 育児期女性におけるQuality of Life(QOL)の経年変化と関連要因 - 0歳・1.6歳・3歳時点での比較 -
3. 学会等名 第8回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 波田弥生、都筑千景、榎本妙子
2. 発表標題 母親の子どもに対する不適切な養育行動の構造と現状
3. 学会等名 第6回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 榎本妙子、都筑千景、波田弥生
2. 発表標題 育児期女性における不適切養育行動の変化とSense of Coherence(SOC) - 4か月時点と1.6歳時点の比較 -
3. 学会等名 第6回日本公衆衛生看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 都筑千景, 榎本妙子, 波田弥生
2. 発表標題 育児期女性におけるQuality of Lifeおよび養育行動の経時的変化～0歳時点と1歳時点の比較～
3. 学会等名 第20回日本地域看護学会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

育児期女性に向けた月経周期に関連する症状に着目したヘルスリテラシーを向上させるための啓発パンフレット「子育て期の女性のQOLについて考えてみよう!」を作成

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	榎本 妙子 (Taeko Masumoto) (50290218)	同志社女子大学・看護学部・教授 (34311)	削除：2022年6月16日
研究分担者	加藤 憲司 (Kenji Kato) (70458404)	神戸市看護大学・看護学部・教授 (24505)	追加：2018年8月27日 削除：2022年6月16日
研究分担者	森本 明子 (Akiko Morimoto) (90710377)	大阪公立大学・大学院看護学研究科・教授 (24405)	追加：2022年6月16日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------